

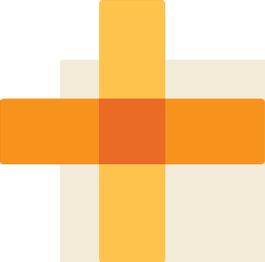
オレンジクロス

～ 理想の地域包括ケアシステム創造に向けて ～



一般財団法人

オレンジクロス



巻頭言

わが国では介護保険給付サービスが普及した結果、1990年代まで各地で見られた、寝たきりで褥瘡が体の各所に発生し、清潔も保てなかったような要介護状態はほぼ解消できたと言ってよい。要介護・要支援状態になっても、ケアマネジャー等が的確なケアプランをつくり、それに基づく適切な介護サービスを利用すれば、家族環境や家計の経済力が悪くないかぎり、褥瘡だらけや不潔にはならず、一応の生活を送れるはずである。

ではその結果、日本の介護問題は解決したのだろうか。残念ながら答えは違う。介護保険が発足した2000年から2015年度に至る要介護者数の推移を見ると、当時の200万人から600万人に増え、今なお要介護者数は増加し続けている。つまり要介護状態になっても介護サービスを利用すれば悲惨にならずに済むように社会は進化したものの、要介護者の発生増という根本的趨勢そのものは止められていない。

要介護者増の理由としては、「核家族化によって家族機能が低下したから」「日本の高齢者が虚弱化しているから」「介護提供体制が衰退したゆえ」などが仮説としては成り立ちえるが、本当のところはどうだろうか。

まず、高齢者保護にかかわる日本の家族力は、通説と違って向上している。子と同居する高齢者数は、1980年約700万人、2014年は約1,400万人と倍増してきた。もっと前の1960年には、子と一緒に住む高齢者はたった約400万人しかいなかった。最近50年間、65歳以上の高齢者が子と住む数は増え続けており、つまりは高齢者を支える日本の家族力は向上している。

次の「高齢者は弱くなっている」仮説を検討するため、高齢者の体力・運動能力の推移データ（文科省）を見ると、15年間で65歳から80歳すべての年齢階層で向上している。平均値で見ても、15年戻すと5歳下の体力向上を確認ができる。

3番目の日本の介護提供体制衰弱説はあてはまるだろうか。介護サービス提供体制については、事業所数も在所者数も右肩上がり続けている。介護職員数に関しては、1990年には10万人だったのが、2000年に55万人、いまは約200万人に近づいてきた。介護人材不足と言われるが、職員数が減った年度は一度もない。少ない年でも5万人、平均では毎年9万人ずつ介護従事者は増え続けてきた。つまり介護提供体制が衰退しているわけではない。介護需要の伸びの方が大きいために不足感が続いていると理解すべきである。

よって上記3仮説は否定できる。要介護者の増加が止まらない理由は、「医学医療の発達によって超高齢者が増え続けるから」につきる。経済的先進国はすべて、この状態にぶつかっている。人類が経験したことのない、たくさんの虚弱高齢者が生きる社会に直面している以上、新しい知恵が求められる。地域包括ケアシステムはその代表である。

慶應義塾大学名誉教授
一般財団法人オレンジクロス理事

田中 滋



第2回 オレンジクロスシンポジウム

第1部

エピソードコンテスト表彰式



このエピソードコンテストは、現場で活躍している方にフォーカスし“現場での思いをみな様と共有したい”との財団設立者の意思によりスタートしました。

まず、記念すべき当財団主催の第2回エピソードコンテストにて、素晴らしい数多くのご応募に心から感謝を申し上げます。選考委員会にて厳正な選考を行い、大賞・優秀賞を決定しました。当初は、大賞と優秀賞のみの設定でしたが、今回特別に選考委員3名の方々からの強い推薦で選考委員特別賞が選出されました。結果、大賞1編・優秀賞3編・選考委員特別賞1編の計5編の選出となりました。表彰式には、5名中4名が出席され、表彰後に次の受賞スピーチをいただきました。

本コンテストでは当財団より、大賞に賞金30万円・優秀賞に賞金10万円・選考委員特別賞に5万円が贈呈されました。なお、受賞作品は、財団ホームページ (<http://orange-cross.org/>) に掲載しております。

選考委員特別賞

「きみえさんちものがたり」 三上薫さん

北海道の夕張からまいりました三上です。このような賞をいただいたこと、大変感謝しております。スタッフや先生共々喜びを分かち合い、本日はスタッフ2人と一緒に会場にまいりました。

私も夕張出身で、今回投稿の“きみえさん”も夕張の私の実家の隣で小さい頃から親交のあった方です。平成24年に定期巡回型サービスが始まり、半年後からきみえさんのお世話を始め、お看取りまで関わらせていただきました。お亡くなりになった後、ご家族様から『この家を使ってくれないか』との大変貴重なお話をいただき、現在私たちの事務所として使わせていただいています。そのご家族様にも今回の投稿趣旨をお話しし、ご快諾をいただきました。特別賞の一報に際し、祝電をいただく程、今も仲良くさせて頂いております。

夕張市は、高齢化率が約49%。私たちも居宅定期巡回型訪問介護等3つの事業所を運営しておりますが、定期巡回が浸透しないジレンマを抱えています。今後も地域の方々に信頼され、“ささええるさん”をお願いしてよかったねといわれるように、頑張りたいと思います。本日はこのような賞をいただき、本当にありがとうございました。



三上薫さん

優秀賞 3名の受賞

「そばにいてくれたらいいから」 稲葉典子さん

「今も心に誓った介護」 大澤憲夫さん

「かざぐるま」 三島裕子さん

(三島さんは介護の仕事のローテーションで、予定がつかずご欠席)

「そばにいてくれたらいいから」 稲葉典子さん

兵庫県西宮市からまいりました稲葉です。普段は訪問看護師として、甲子園球場周辺を自転車で走り回っています。受賞の一報には大変驚きました。また本日の式典に参加させていただくことができ、心から感謝しております。

今回のエピソードには2人の患者さんに登場していただきました。1人目の方は、私が20年前、看護師4年目で千葉県某の病院で働いていた時の方。2人目の方は、今年2月に亡くなられた方。1人目の方と同じ疾患で、男女の違いはありますが、タイトルにある同じ言葉を私に言ってくれた方々です。お二人とも内容を書きとめる事を希望されており、今回“言葉”を残すことができ、お披露目もできて、約束が果たせた思いです。

受賞分は個人名の応募でしたが、もう一遍を所属名義でも応募しました。動機は“訪問看護の仲間への感謝”を伝えなかったからです。

現在、訪問看護ステーションの管理者の立場ですが、看護師達も様々に悩む中、在宅での看取り支援の中でよくスタッフと共有する言葉があります。選考委員の秋山正子



稲葉典子さん

さんの『在宅ケアの不思議な力』という著書にある“看取りの過程で、訪問看護師と辛い時間を共有した同志という言葉。思い出を一緒によみがえらせ、その思い出を引き出し、それを引き出す中で肯定的な感情に変わっていきける。”訪問看護の仕事は大好きです。現場の仕事が大好きだからこそ、スタッフにも現場の仕事のことを好きになってもらいたい。優しいコミュニケーションを通じ、患者さん達からも信頼してもらえるステーションづくりを進めたい。その意味でも、自分自身を高めていく必要性を日々痛感しています。

今回の受賞は私の力ではなく、仲間・関係者・患者さん・利用者さんのおかげです。改めて心から感謝を申し上げ、お礼の言葉とさせていただきます。

「今も心に誓った介護」 大澤憲夫さん

現在、神奈川県横須賀で認知症の方が入居されるグループホームで管理者をしております。今回は故郷の青森県津軽地方にて、2年ほど特別養護老人ホームに勤務した時の体験をまとめました。

当時、認知症の方——今、認知症といいますが、昔、痴呆・ぼけ老人という呼び方をしていました。私が勤めた頃が1980年代、認知症の方に対する経験や参考文献などは本当に数えるほどで、アルツハイマーという言葉が珍しい時代でした。介護内容も、30年前は大変でした。漏便・便じりの防止の為につなぎの服を着せたり、車椅子で転倒しないように縛ったり、ベッドに縛ったり。当時は“その



大澤憲夫さん

方の為に！”との一念でした。しかし、それをおかしいと思う方が後に思いを馳せ、10年、20年かけ、いま介護保険も始まり介護内容もかなり変わってきています。

今も一生懸命、認知症の方のケアのエビデンスを踏まえてやっています。しかしまた10年、30年先に振り返った時、果たして“あの時は本当にいい介護をしていた”となっているか？——認知症の方は徐々に言葉とか様々な方法をなくしコミュニケーションが困難になる為、介護するわれわれ側が“本人はどう思っているのか、どうしてほしいのか”を感じ取り、考えてケアしていかなければいけない。そんな生活環境を整えることで認知症状が進行しない、または軽減していくかもしれない。そうして10年、20年たっても、“いいケアをしていたね”と思われるような介護を私はしていきたい。今グループホームの管理者としても、それを皆に伝えています。

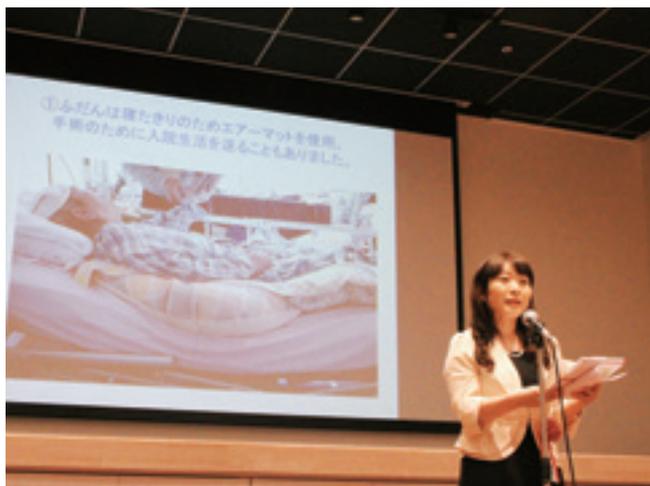
ケアの仕事は派手ではなく、どこかで皆が憔悴しきってしまう時もあります。しかし、今回の受賞により、エネルギーやパワー・未来に対する希望をいただき、大きな力になりました。これから10年、20年先も頑張っていきたいと思います。

オレンジ大賞

「地域のつながりが生んだ支援」 川手弓枝さん

本日は名誉ある賞を賜り、誠にありがとうございます。作品の中で私は、支援する側と支援を受ける側の2足のわらじを履いていました。2015年の国内高齢化率は26%。作品当時における我が家の川手家高齢化率は75%、なんと国内高齢化率の約3倍近い数値。当時の家族構成は、私を除く3名が65歳以上で、要介護3の祖母、要介護5の父、そして家族介護者の母と私という4人暮らし。たんの吸引・経管栄養・摘便など家族介護者が行う必要があり、365日24時間の介護体制でした。15年前に先立った祖父の在宅介護が13年間、父が10年間、祖母が3年間と、通算して在宅介護は23年。私の人生の半分以上が在宅介護と共にありました。

祖父の介護に協力してくれた父は、約10年前に悪性脳腫瘍を発症し、手術の後遺症による右麻痺・失語症・嚥下障害のために寝たきりに。父の名前は義幸（よしゆき）と申します。リハビリ時に理学療法士さんのお言葉“義幸さんは本当に奇跡の人だね”を機に、周りの方から奇跡の人と



川手弓枝さん

呼ばれ、大層立派な、身に余るもう1つの呼び名を頂戴しました。寝たきりの父のどこに奇跡を感じられたのか？と思い、振り返りました。

父は筋力低下のため、寝たきりでした。よく便秘になり、自力でおならもできず、ガスが溜まる為に苦しがりました。父は身体が硬くて辛かった中でも、根気よくリハビリに取り組んでくれ、立つとおならが自力で出せるようになり便通に改善がみられました。

また、ある補装具との出会いがあり、自力では全く歩けません、これを装着して後ろから介助してもらい、歩かせてもらえるようになりました。ずっとベッドから天井を見上げるのではなく、元気だったところの視線を取り戻し、父がもう一度だけ笑ってくれました。満足げに、誇らしげに、“寝たきりになっても、あきらめずにやれば何だってできるのだぞ”と言いたげでした。

昨年9月に父を見送りました。自宅で家族と過ごすことを生きがいとしていた父が、最期を迎えた場所は病院のICUでした。そこに至る治療に関し、家族として大変大きな後悔と罪悪感が残りました。自分だけ生き続けていることが申し訳なく、父に詫びる日々が続き、生きることが辛くなりました。それから半年間、家族以外の人と会うことができなくなり、引きこもり状態で過ごしました。大切な人を亡くした時、残された人は、愛が深いゆえに心が砕けてしまうほどの衝撃を受け、生きていくことがつらくなるほどの危機的状況に陥る場合があるのだということを、父が人生をかけて家族に教えてくれました。

この経験を通し、『もしも家族を亡くした大きな悲しみで日常生活が困難となった場合の支援はあるのだろうか？』を自分に気付かされました。新聞で近所にグリーンカフェ

ができたこと知り、「1人ではなく、よかったら一緒に語りませんか」と紹介され、ここに参加したことが社会復帰の第一歩となりました。

大切な人を亡くした時の引きこもり体験とグリーンカフェの参加体験から、地域の中には介護を終えてからも継続した支援を必要としている介護者がいることを身をもって知りました。介護経験のある方や大切な人を亡くされた方の経験が、地域包括ケアシステムの構築にフィードバックされるように、今後とも精進してまいりたいと思います。

4名のスピーチの後に、審査委員長であるシルバー新報の川名編集長が全体の講評を行いました。『設定した評価ポイントは、「仕事への姿勢」・「情熱」・「文章力」・「メッセージ性」でした。しかしなかなか差異はつかず、メッセージ性の僅かな差異で受賞作品が決定しました。オレンジ大賞は満場一致で川手さんでした。保健師時代に経験した連絡ノートを家族として作成し役立てた、その中に“自分が支援する側と支援される側との受けとめの違い”をさり気なく盛り込み、且つ非常によく分析されており、理性的な文章でした。私は介護の現場、訪問介護、在宅の現場にはたくさんの宝が眠っていると思います。是非このコンテストを継続され、たくさんのエピソードを発信していただきたいと思います。』

財団では、今年も本コンテストを開催します（2月1日～4月28日、詳細はホームページに掲載）。みな様はもちろん、お近くの方にもご紹介いただき、お互いにいろいろなエピソードを共有して、よりよい在宅ケア・地域包括ケアに向かっていける一助になればと考えています。



審査委員長：シルバー新報・川名編集長

技術革新がこれからの介護において非常に重要になるといわれる中、介護ロボットがどう進化していくのか？またこれが我々の介護分野をどう変えるのか？その分野についてご講演いただきました。日本の介護ロボットの開発のリーダーであり、また自らもモノをつくられる。そして政策の制度も変えていくというお立場なので、介護の未来を窺う意味でも、当日の参加者には非常に有益なものとなりました。



比留川氏の介護経験は、二十歳過ぎに祖父の介護に接し、在宅介護で夜中に背中を押すことが一晩に5、6回。「あまり寝られず入院まで3か月、弟と一晩交代で結構きつかったことを鮮明に覚えています。また祖母は長らく入院していましたが、両名共に当時床ずれを防ぐ技術がなく、それも肉がみえるような床ずれができて“何もできない”非常に無力さを感じていました。」ひと世代を過ぎて父親が2年前に亡くなり、いまは84歳の母親が日常生活を何とか家で送っている状態。

『この母親に自分の仕事が間に合うかもしれない』——最近、経産省にAMED（日本医療研究開発機構）が設置され、ロボット介護機器のプロジェクトが運営されています。非常に大きなプロジェクトで、予算が年間20億円。民間企業も48社参加。同プロジェクトに関する8分野を順番にご紹介（移乗支援・排泄支援・入浴支援など）。事例で“重篤な事故の9割は浴槽”（東京消防庁データ）などを挙げながら、製品がリスクとベネフィットの関係でどう受容されるか、また本質安全設計のアセスメントシートをどうつくるかに至るまでの説明を詳細にお話いただきました。

目標については、「何より役に立ちたい。それぞれ介護される側は参加活動をしたい。やはり世の中に最後まで参加して、友達に会いに行きたい、例えばお芝居を見に行きたい

等。また介護する人の『やりがい』が増えてほしい。作業負担も多いよりは少ない方がいい。介護事業者には利益が増大してほしい。事故も少ない方がいい。今、人手不足が深刻なので、離職率が低い方がいい。行政からすると、多分一番大きいのは総介護費の抑制。3.6兆円で始まって最後9兆円ですから。」

比留川氏自身も方向性としては、自立支援を目指すのが一番いいと感じられており、“トイレに自分で行ける、したい移動ができる、行きたいところへ行ける、できれば自宅で暮らす”それらを支援する機器ができるのが一番いい。何がそれに適しているかは、屋外移動支援、屋内移動支援、非装着型移乗支援、見守り。技術的にも経営面からも課題がありますが、実用化の鍵は有用性と安全性。そして現実的に、小型化や簡素化への対応は1～2年で目途がつきそうだが、まだ時間が掛りそうなのは高いコストへの対応。

現在、介護会社の事故データを全部産総研へ渡して分析中。事故報告をすれば、それによって学びがあり、現場で事故を減らすOJTにもなり、原因の究明に繋がる。産総研と一緒につくったフォーマットに従い収集してきたデータは、非常に将来に使えるデータになってまいりました。科学と組むことで現場は進化できると感じています。



あの時選択した道を、これからも歩んでいく。



第3回 看護・介護 エピソードコンテスト

【テーマ】伝えたい！わたしの看護・介護エピソード

オレンジクロス
大賞
(1名)

30万円

オレンジクロス
優秀賞
(3名)

10万円

表彰式

2017年7月21日(金)14時～

受賞者は選考委員の秋山正子氏がセンター長を務める
“マギーズ東京”の見学、秋山氏との懇談会もあります

選考委員



秋山正子
暮らしの保健室 室長



川名佐貴子
シルバー新報 編集長



溝尾 朗
JCHO東京新宿メディカルセンター
地域連携・相談センター長

- 募 集 期 間 2017年2月1日(水)～4月28日(金) ※当日消印有効
- 応募字数・書式 400文字以上・A4横書き(手書き不可) ※未発表作品に限ります
- 応募資格 日本国内で看護・介護業務に携わっている方(個人・団体は問いません)
- 提出書類 ①申込用紙…一般財団法人オレンジクロスホームページ(orange-cross.org/)の応募フォームから印刷してください。
②エピソード本文…Word形式の原稿データ
- 応募方法 ①メール…info@orangecross.jp
②郵送…〒104-0031 東京都中央区京橋2-12-11 杉山ビル6F
一般財団法人オレンジクロス『看護・介護エピソードコンテスト係』宛
※詳細は一般財団法人オレンジクロスホームページ(orange-cross.org/)でご確認ください。
- お問い合わせ 一般財団法人オレンジクロス『看護・介護エピソードコンテスト係』
[電話] 03-6228-7216 [メール] info@orangecross.jp

地域の皆が集えて多彩な活動になる「場」をつくり、
より住みよい地域を目指して。



コミュニティスペースややのいえ 代表/合同会社プラスぽぽぽ 代表(訪問看護ステーションややのいえ コンチネンスケア・イノベーションセンターおまかせうんちッチ)/NPO法人いのちにやさしいまちづくり ぽぽぽねっと 理事長/NPO法人ホームホスピスこまつ 理事長/ちひろ助産院 院長

榊原千秋さん



石川県小松市で「コミュニティスペースややのいえ」などを運営する榊原千秋さん。保健師としてご自身が活動していく中で、さまざまな取り組みに挑み、NPO 法人の発足やコミュニティスペースの開設などを手がけてきました。その経緯や考えについて、お話を伺いました。

活動が集まる、「拠り所となる居場所」

——「ややのいえ」の活動内容を教えてください。

「ややのいえ」とは、様々な活動の「拠り所」のようなものです。空き家となっていた民家を借り上げ、私が行っている様々な活動の拠点となっているほか、赤ちゃんから高齢者の方まで地域の方がいつでもふらっと立ち寄れる「場」としても活用しています。

具体的な取り組みは多々ありますが、それらはすべて「プラスぽぽぽ」の理念に基づいて活動しています。「とことん当事者」「人として出会う」「自分ごとから考える」当事者や家族も含めた「十位一体のネットワーク」、この4つを活動理念として、NPO 法人「いのちにやさしいまちづくりぽぽぽねっと」を主体としてさまざまな活動を実施するほか、「合同会社プラスぽぽぽ」では「訪問看護ステーションややのいえ」「コンチネンスケア・イノベーションセンターおまかせうんちッチ」を運営しています。さらにはちひろ助産院、Café Ya-Ya、保育プロジェクト「チームおまかせうんちッチ」など、多岐にわたる活動をしています。また、小松の

多主体多職種ネットワーク「こまつおもいやりのまちづくりプロジェクト」の事務局など、「ややのいえ」には、地域の様々な方々が集まってきます。

新社会人の経験が生きる

—— そのように多岐にわたる活動を行うようになった理由は？

保健師として仕事に取り組む中で、一人ひとりと向き合い、その方の願い事や今一番したいことに応えたいという思いから、自然と活動の幅が広がっていきました。こうなろうと思ってなったわけではなく、出会わせていただいた方々にていねいに寄り添い、かかわらせていただいた結果だと感じています。

これは、保健師としてスタートしたときの経験が原点となっています。私は愛媛の出身で、保健師学校を出てすぐ、津島町（現宇和島市）の役場の保健師となりました。私の最初の受け持ち地区は住民が700人ほどの集落で、地域の隅々まで家庭訪問ができました。高齢化が進んでいて、健康相談にいつもいらっしゃる方がみえないので心配になって家庭訪問したら家で倒れていた、なんてこともありました。町民の誰もが保健師の存在を知っていて、保健師の役割は重要でした。日々の保健師活動は、個々のヘルスニーズから、地域のヘルスニーズをとらえ、地域アセスメントから地域の課題を明確にしたり、地域住民のセルフヘルプグループを育成して一緒に活動したり、今でいう「地域包括ケア」の原点のような活動がすでに根づいていました。



取材日に集まっていた皆さんとともに。転勤族のママさんと地元の人が集う



カフェでは、コーヒーなどの定番のほか自家製の梅サワーや酒粕豆乳ヨーグルトなどの多彩なメニューを提供



民家のリノベーションだったスペースには老若男女、あらゆる人たちが集う

地域包括ケアを先駆けて実施

——なぜ小松市に転居されたのですか？

結婚した夫の実家が小松だったからです。最初は転居に葛藤もありました。生まれ育った町で保健師をすることは、小さい頃からの夢でしたから。最初はとにかく誰も知り合いがいなくて寂しいばかり。転居してしばらくして、ちょうど小松市が巡回入浴車事業を拡大するので、看護師を探していると聞き、働き始めました。巡回入浴車のヘルパーとして社会福祉法人「松寿園」に派遣されました。当時ヘルパー1級研修を受講したことも福祉に関心を持つ転機になりました。妊娠をきっかけに退職しましたが、当時の松寿園の岩田理事長に、「これからは地域福祉の時代」と、今でいう地域包括支援センターと訪問看護、地域リハビリをあわせたいような活動をしたいと夢を語り合いました。

当時は、福祉サービスの利用にまだまだ偏見がある時代でした。ヘルパーも家庭奉仕員と呼ばれている時代で家事支援が中心。そこで施設の介護職が在宅に出かけていく介護ヘルパー制度ができたばかり、在宅介護サービスも自宅での看取りも十分に行き届いていない状況でした。

松寿園は先進的な社会福祉法人で、私のような保健師が在籍していたのは当時としては珍しかったと思います。要介護の方のところ市に市の保健師さんや主治医と同行する機会も多く、介護者の方々と一緒に介護者の会を立ち上げたり、公民館で介護教室をして地域住民と語り合ったり、地域包括ケアの先駆けとなる活動に取り組んでいました。

自分の活動を通して、ご利用者やご家族から得た学びが、いまの「プラスぽぽぽ」の理念の礎です。お一人お一人、ニーズも状況も違う中で、保健師としてどうあるべきか、どういう行動をすべきかを考えさせられました。ご本人が本当に幸せと感じ、喜んでいただける拠りどころとなることが大切であると学べました。

活動の輪が広がる

——保健師としてどのような活動を？

お一人お一人のご要望やニーズに合わせて、総勢40名の温泉

ツアーや「失語症ライブ」など、何でもやっていましたね。そうすることで自分の知識もどんどん広がり、深まっていきました。小松という地方都市では学べることも限界があるので、全国各地のさまざまな会合やセミナーに出て、生活リハビリや排泄ケアなど興味ある分野の知識を深めていきました。もちろん自費ですよ。今考えると3人の小さな子供を抱えて「よくやってたな」と思うのですが（苦笑）、周囲にも意欲ある方がたくさんいて、とてもワクワクして楽しかったですね。皆、とにかく地域に貢献したい、新しい時代を築きたいという気持ちが強くて刺激になりました。

——活動の転機となったことはありますか？

1995年に交通事故に遭って、3カ月入院、1年のリハビリの間、将来どのように生きていくか悩むようになりました。そんな折、1996年に筋萎縮性側索硬化症（ALS）で在宅療養をはじめられた西尾健弥さんのところに市の保健師さんにお連れいただきボランティアとして出会わせていただきました。少しでもその方力になりたいと仲間たちと「ALSと仲間たち」を結成。ホームコンサート、能登半島や白馬への旅行のサポートをしました。生と死の文化を豊かにする「魂のいちばんおいしいところ」のコンサート＆講演には、詩人の谷川俊太郎さんや医師の徳永進さん、シンガーソングライターの小室等さん、作家の柳田邦男さんが賛同してくださり、西尾さんが他界されてからも続けて開催し、今年で20年を迎えました。コンサートに参加して下さった方が、ボランティアとして参加して下さるようになって輪が広がりました。人の心に響き「心を動かす」しかけをどう作っていくかを学んだ20年でした。

常にいる場所をつくる

——2002年に金沢大学大学院に入学された理由は？

交通事故のあとJAが創設した社会福祉法人に再就職しました。ちょうど介護保険が始まるころで、ケアマネジャーとして5年働いたときに、このままでは保健師としてのアイデンティティが崩れてしまうと感じてしまったのです（笑）。改めて学び直そうと思い大学院に社会人入学しました。2004年に修士課程を終え、



2階の1室を事務所とし、さまざまな業務に対応できるようにしている



裏庭は自家農園にして、いろいろな野菜をつくっている



木曜限定のランチに使う野菜は裏庭でつくられたものばかり

縁あって金沢大学の地域看護の教員になりました。

教育や研究の傍ら、地域の活動も周囲の協力を得ながら続けていました。とにかく忙しく目の回る日々を送っていたのですが、やはり地域としっかり密着した活動こそ私の天職と考え、2015年に大学を退職し、この「コミュニティスペースややのいえ」を立ち上げました。

活動をする中で知り合った地元不動産会社の社長さんが、この家を紹介してくださいました。「ここに行けば榊原がいる、という“場所”をつくれ」と。皆が気軽に集えて、安全で安心な場所、

悩みもすぐに相談できる、そんな場の中心になれ、と。ちょうど金大を退職してすぐにこの物件が決まるというウソみたいなタイミングのよさでした（笑）。

—— コミュニティスペースではどのような活動を？

ご利用して下さる方々からは、まるで実家に帰ってきたよといわれます。ご利用さんのニーズの数だけ。例えば今ここにはたくさんの赤ちゃん連れのお母さんが集まっています。県外から嫁いでこられた方や転勤族の方が多いですね。そんな方々の憩いの場になっています。ママさんたちが自主的に「ママボラ」というボランティアチームを立ち上げてくださり、「ややのいえ」の活動を手助けしてくれています。

また2016年4月から訪問看護ステーション事業をスタートしました。訪問看護師4人と理学療法士が業務にあたっています。

さらに、子どもや高齢者、障がい者、近隣の人など、どんな人でも気軽に集える場でありたいとの思いから、カフェ「Café Ya-Ya」をはじめました。コーヒーや自家製の野草茶、ケーキや酒粕豆乳ヨーグルトをご提供するほか、毎週木曜はランチもご用意し



2016年11月3日に小松の「サイエンスヒルズこまつ」で開かれた「レッツうんこコミュニケーション」。絵本作家や企業の方々、ママボラの協力のもと、「便育」について楽しく分かりやすく学んだ

ています。ご近所の方、訪問看護のご利用者さんやご家族にとっても憩いの場となっていて、さらにややのいえで、人と人がつながるご縁をとともうれしく思っています。

排泄ケアのできる人材を育てる

—— 地方自治体とはどのように連携していますか？

石川県や小松市から助成金を得られるプロジェクトへの参加も積極的に行い、「石川県高度・専門医療人材養成支援事業」「小松市ふるさと共創チャレンジ事業」に2年連続で応募し採択されています。

そのうちの1つ「おまかせうんチッチ」は、人には話しづらけれどとても大事な排泄について支援する事業です。保健師として働きだした20数年前から、介護者の排泄ケアは十分とはいえ、今のような高機能な大人用紙おむつもありませんでした。そんな状況を打破したいと思い、日本コンチネンス協会北陸支部の立ち上げに参加し、のちには支部長を務め2009年にはNPO法人化。正しい排泄ケアが教えられる環境を整えていきました。



発病以来、3年と7日にわたって病院で過ごしている方がご自宅に戻るお手伝いも



写真家でジャーナリストの國森康弘さんの講演に先立ち、こまつ芸術劇場うららで写真展を開催



認知症の方でもお芝居に参加でき、認知症のことが学べる「認知症金糸夜叉」を地元の病院の方々と一緒に企画

金沢大学大学院では、2004年から2015年まで排便ケアの研究に取り組み、排便ケアのプロフェッショナルを育成するプログラムの開発で博士論文を執筆しました。2006年から実践研究を続けており、その中で生まれたプロジェクトが「おまかせうんちッチ」です。「0歳からの便育」をテーマに掲げ、地域の排泄ケアの相談窓口としての役割だけでなく、「POO マスター」と称した排便ケアのプロフェッショナルの育成にも努めています。ただ知識だけでなく、実際にどのようにケアするかをシステム化するアクションプランを立案してもらうなど、実践的な教育を心がけています。POO マスター養成講座は「ややのいえ」で定期的で開催するほか、今年は久留米市や東京でも開催予定ですが、この輪を全国に広げるためにはまだまだ人材が足りません。全国のあらゆる医療・介護施設や病院にPOO マスターが在籍した理想的な状態を試算したところ、約400万人が必要とのデータが出ました。どんどんPOO マスターを増やしていくのが今の目標です。

終末医療にも取り組む

—— そのほかの取り組みについて教えてください。

「ややのいえ」を拠点にいろいろな活動を行っています。NPOの「ぼぼねっと」としては、がんや病気でも食べやすい料理について学び、ともにつくる「いのちのスープの会」、人に人生の歩みを聞き、それをそのまま書きおこす「聞き書きの会」などはその輪がどんどん広がっています。ちなみに昨年は小松市ふるさと共創チャレンジ事業で取り組んだ、若者が主体的に生きていくための学びをした「グリコの会」では婚活も実施しており、カップルが成立しているんですよ。

さらにぼぼねっとの障がい者の当事者部会では、小松市内を巡りバリアフリーマッププラスとってバリアフリーの設備だけでなく、思いやりのある人を見つけて紹介するマップを小松市や小松短期大学や自立支援協議会と協働でつくりました。また、「こまつおもいやりのまちづくりプロジェクト」と称した取り組みでは、石川県からの補助金を受け「こまつ認知症サミット」を開催するほか、小松市からの委託事業として認知症ケアコミュニティマイスター事業を行っています。そして、認知症ケアを学ぶだけでなくアクションできる人材を育成する「こまつ認知症ケアコミュニティマイスター事業」を実施するなど、認知症の方でも安心して暮らしやすい街を目指しています。

また、終末医療への取り組みにも挑みたいですね。以前、松寿園の保健師だったときに、「ふれあいのまちづくり事業」の一環として地域の公民館を巡回し、在宅での看取りの経験をスライドにしてお話しして回りました。この取り組みは、皆さんから大変な反響をいただき、「両親をぜひ自宅で看取りたい」「わたしのときも自宅で最期を迎えたい」と、その後実際にかかわらせていただきました。私は四国の生まれで、実家がお遍路道のお寺のすぐそばだったため、身近な人を亡くされたばかりのお遍路さんをお

迎えることも珍しくありませんでした。「死」を近くを感じる場だったと言えますね。それが根底にあると思います。近年まで行われていたお寺までの野辺送りは、「楽しくあの世に逝けますように」という意味があったとお聞きし、なんと豊かな死の文化だろうと思いました。今、NPO法人「ホームホスピスこまつ」を立ち上げ、ホームホスピスを準備中です。地域の看取りの文化、生と死の文化を豊かにするまちづくりとともに、人生の最期を「いろいろあったけどいい人生だった」と気持ちよく迎えられるような「真の抛りどころ」となれるよう、お手伝いをしていきたいです。

コミュニティナースの育成へ

—— 今後の目標を教えてください。

小松のコミュニティヘルスの実現が、直近の最大の目標です。保健師として活動していたときから、「コミュニティナース」の存在が、地域包括ケアを実現するために不可欠な存在だと考えていました。かかりつけの看護師の発想です。地域の多主体多職種のネットワークがあって、ともに情報収集してアセスメントしてケアや対処方法が選択できる。個別のご相談に乗るのはもちろん、ケアもでき、エリアマネジメントし地域の課題を把握しチームを組んでアクションできる。そんな存在が、これからの高齢化社会には必要だとずっと感じていました。「ややのいえ」はその一端を担わせていただいています。まだそれが実現しているのはほんの狭いエリアだけ。これをどんどん広げていきたいです。

私たちの活動を少しでも多くの方に知ってもらい、その輪が広がればいいと思いオレンジクロス「地域包括ケアステーション実証開発プロジェクト」（2015年2月～2016年3月）に参加し、ワークショップでは取り組みについて報告する機会もいただきました。これからも地域包括ケアに取り組む全国の団体と連携して、お互いのいいところを高め合っていきたいです。



コミュニティスペースややのいえ

〒923-0945 石川県小松市末広町88

TEL 0761-48-4988 営業時間 10:00～16:00

※土・日・祝日はお休みですが、地域で様々な企画を行っています。

※宿泊も承れます。詳しくはお電話ください。



(詳細は逐次財団ホームページ <http://orange-cross.org/>) にてご案内します)

● **第3回オレンジクロスシンポジウム** 参加無料

日時：7月21日(金) 14時～17時 (14時～15時はエピソードコンテスト表彰式)

会場：トラストシティカンファレンス京橋 STUDIO2・3 (京橋トラストタワー4F)

演者：暮らしの保健室 室長/マギーズ東京 センター長 秋山正子氏

演題：「つながる・ささえる・つくりだす在宅現場の地域包括ケア」

講演概要：日々の業務に追われる中でも、お互いに繋がりあう実感が得られる瞬間があります。そこから互いを支えあう地域との拡がり、そこから新しいものが作り上げられていくプロセスが見えます。始まりは、毎日の実践、利用者に向き合い、その家族、地域へと目を広げればそれが「地域包括ケア」につながります。

● **オレンジクロスセミナー**

・ **第1回** 賛助会員無料 一般参加5000円

日時：4月21日(金) 15時～17時

演者：静岡大学創造科学技術大学院 特任教授 竹林洋一氏

会場：TKP 八重洲カンファレンスセンター

演題：「認知症の介護のエビデンスをつくる認知症情報学」

講演概要：認知症の医療の限界が示され、ケアの可能性が注目されるようになりました。様々な分野の専門家や地域・施設による、介護の高度化に向けた取り組みが活発化しています。ところが、「介護空間」は閉鎖的であり、また、認知症の診断や介護技術は発展途上なので、エビデンスが不足しています。講演では、認知症の「見立て」、認知症ケア技法「ユマニチュード」の「見える化」、介護施設におけるチーム介護のコミュニケーションの評価など、静岡大学の認知症情報学のエビデンスやデータベース構築を機軸にした研究を紹介します。

・ **第2回** 賛助会員無料 一般参加5000円

日時：9月22日(金) 15時～17時

演者：静岡大学創造科学技術大学院 特任教授 竹林洋一氏

会場：TKP 八重洲カンファレンスセンター

演題：「人工知能と情報技術による認知症ケアの深化・発展」

講演概要：人工知能(AI)や情報技術(IT)による第四次産業革命の萌芽期となり、高齢社会における医療や介護の世界を大きく変えることは間違いありません。講演では、高齢社会を安心、安全、豊かにするためのAIとITの技術トレンドについて解説し、情報処理学会の高齢社会デザイン研究会の取り組みを紹介します。さらに、人工知能学会の近未来チャレンジプロジェクト「認知症の人の情動理解基盤技術とコミュニケーション支援への応用」での研究成果を中心に、認知症ケアの深化と今後について論じます。

・ **第3回** 賛助会員無料 一般参加5000円

日時：11月(予定)

テーマ：「介護分野における人口知能の応用」(仮)

演者：未定



一般財団法人オレンジクロス 賛助会員募集のご案内

一般財団法人オレンジクロスの活動趣旨・取り組みにご賛同いただける
個人・法人の賛助会員を広く募集いたします。

● 賛助会員年会費：個人会員（1口）10,000円 法人会員（1口）100,000円

● 期 間：毎年7月1日～翌年6月末日

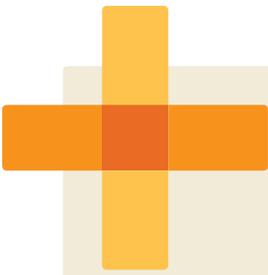
● 賛助会員特典：① 各種情報提供
② 広報誌の配布
③ 各種セミナーの無料招待
(セミナーの内容は13頁を参照下さい)

● 申し込み方法：当財団ホームページ『賛助会員について』から
申込書をダウンロードして頂き、FAXにてお申込み下さい

<http://orange-cross.org/about/member/>

(アイウエオ順)

法人賛助会員	URL
株式会社コスモスケアサービス	http://www.cosmos-group.co.jp/care
株式会社ツクイ	http://www.tsukui.net
株式会社デベロ	http://www.develo-group.co.jp
株式会社福祉の里	http://www.fukushinosato.co.jp/
株式会社やさしい手	http://www.yasashiite.com
公益財団法人 星総合病院	http://www.hoshipital.jp
合同会社リハビリコンパス	http://www.compass100.jp
社会福祉法人 こうほうえん	http://www.kohoen.jp/
社会福祉法人 伸こう福祉会	http://www.shinkoufukushikai.com/
社会福祉法人 豊の里	豊栄グループ： http://www.houei-group.or.jp
	豊栄クリニック： http://www.houei-group.or.jp/clinic/index2.html
田邊ホールディングス株式会社	http://www.b-staff.jp
日本生活協同組合連合会	——



財団の活動

一般財団法人オレンジクロスは、
『地域包括ケアシステムへの最大の貢献を目指す』研究財団です。



自らが研究を行い、地域包括ケアシステム構築に資する新たな価値を**創造**

医療・看護・介護の現場で活躍されている方々の活動を**支援**

高齢者・ご家族の安心した将来の生活環境を構築するための地域包括ケアシステムにおける新たな価値の**啓発**

『地域包括ケアシステムへの最大の貢献を目指す』オレンジクロスの取り組み

研究部門

● ソーシャル・コミュニティ・ナーシング研究会

①地域包括ケア病棟・在宅療養支援診療所・訪問看護ステーション等での実践事例の分析を行い、ソーシャル・コミュニティ・ナーシング機能を抽出 ②医師・看護師・ケアマネジャー等が行う業務を地域ケアという連続性の中で捉え抽出し、抽出した内容の評価を行い『ソーシャル・コミュニティ・ナーシング機能開発プログラム』を開発することを目的とした研究会

● 家庭医療・老年医療研究会

看護師とかかりつけ医との連携強化、在宅診療における医師・看護師・リハビリテーション専門職・介護職などの機能分担・トリアージ基準の構築を目的とした研究会

● 統合ケアマネジメント事例検討会

※国立社会保障・人口問題研究所 / 地域包括ケアイノベーションフォーラムとの共催
様々な生活課題を抱えた利用者の事例をケアマネジャーから発表頂き、医師・看護師・薬剤師・理学療法士・作業療法士などの専門職の方から意見を頂くことにより、より良いケアマネジメントの構築を目的とした事例検討会

● 実証開発プロジェクト（2年に1回）

第2弾は、北米の統合ケアプログラムを皆様と学んでいく予定です
具体的な内容につきましては近日、ホームページに掲載します

啓発部門

● 広報誌の発行（年2回）

● 看護・介護エピソードコンテスト（年1回）

● 公開シンポジウムの開催（年1回）

● オレンジクロスセミナーの開催（年3回）

一般財団法人オレンジクロスは、『地域包括ケアシステムへの最大の貢献を目指す』ため研究部門では2つの研究会・1つの事例検討会・1つの実証プロジェクトを、啓発部門では4つの取り組みを進めています。



広報誌 オレンジクロス | 春号 2017 SPRING VOL.02 | 2017年2月15日発行

発行：一般財団法人オレンジクロス

〒104-0031 東京都中央区京橋2-12-11 杉山ビル6階 TEL. 03-6228-7216 <http://orange-cross.org/>



本誌は、「植物油インキ」「水なし印刷」を採用した環境にやさしい印刷物です。